

青梅市文化財ニュース

第430号

令和5年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

せんげたかとみ 大澤橋千家尊福公歌碑

御岳山から北東方向へ流れ出る大澤川は、御岳2丁目の琴沢、夏沢の水を集め多摩川に合流します。この合流地点の近くを通る吉野街道には、大澤川上に「大澤橋」がかかっています。橋の北側、街道の脇に歌碑が建立されています。隣には馬頭観音があります。

(表面)

御嶽川なる大澤橋の

開通をよろこびて

東京府知事千家尊福

御嶽川かけわたせるや

このさと(里)の

いよよ さか(栄)ゆく

はし(橋)となるらむ

(裏面)

東京府技手 恩田 岳造

全 工手 菱田 松三郎

三田村長 小澤 芳重

住民総代 市川 正平

全 福田 操三

全 岡部 守衛

他大字一同

片柳鯉之助彫

明治三十六年十二月竣工

千家尊福 (せんげたかとみ) 弘化2(1845)年8月6日～大正7(1918)年1月3日。明治・大正時代の宗教家、政治家。第80代出雲国造。出雲大社宮司。出雲大社教初代管長。杵築大社(現、出雲大社)国造邸に第79代出雲国造千家尊澄の嫡男として生まれた。

明治5(1872)年正月出雲大社大宮司となり、同年4月には教導職権少教正に補任され、明治期の神道界の中心的人物の一人となった。同6(1873)年正月には出雲大社敬神講を組織し、のちの出雲大社教の基礎を創った。また同8(1875)年頃から起こり神道界を二分した「祭神論争」では、伊勢派の田中頼庸らと対立するなど、出雲派の指導者として活躍。明治15(1882)年正月の神官教導職分離に際して際しては、神道の布教の必要性を感じ、出雲大社宮司を辞し、神道大社派(現、出雲大社教)を特立させ、初代管長に就任。同17(1884)年7月男爵。明治21(1888)年以降は政界に入り、元老院議員、貴族院議員、埼玉県・静岡県・東京府の各知事、司法大臣を歴任した。東京鉄道会社社長も務めた。著書に『大道要義』『教旨大要』『国廼真柱』『出雲大神』等がある。

(参考) 松尾直道「神道事典」千家尊福

橋の開通による移動の利便性の向上は、人間活動を活発化させる慶事です。和歌には集落の繁栄が祈念されていますが、この願いは住民にも行政の首長に共通します。この慶事に和歌を寄せたのは当時の東京府知事である千家尊福公です。古代より続く出雲国造であり、出雲大社宮司でありました。幼い頃より国学を学び和歌に親しんでいました。明治31(1898)年11月12日より東京府知事に就任しています。歌碑裏面に当時の三田村長、住民総代の名がありますが、この人々からの依頼に応じて詠んだ和歌でした。

尊福公は明治16(1883)年に青梅市内勝沼の地を訪れていました。出雲大社に鎮まる大国主大神の教えを広める巡教の旅のため、9月19日から23日まで滞在しています。同年6月に市内勝沼の齋藤眞指を主唱者とした132名の人々が、尊福公の青梅での巡教を請願していましたが、これに応じての来訪でした。裏面に名前がある市川正平もこの中の1人でした。この時、尊福公のところに多くの人々が集まり、講話に耳を傾けました。

現在は大澤川と呼ばれますが源流は御岳山にあり、この周辺が旧御嶽村の一部であったため、御嶽川として和歌が詠まれています。当時の大澤橋は現在より低い地点に架かり、橋を渡るためには一度坂道を降り、通過後に再び坂道を登る必要がありました。この歌碑も現在よりも川に近い、坂道の途中にありました。和歌には「栄ゆく」とありますが、坂道を登りゆく途中との意味も込められているのではないのでしょうか。司馬遼太郎は明治時代について、誰もが坂の上の雲を目標に努力をした時代、と述べています。坂道を登りゆく努力が繁栄を導く、ともこの歌碑は語りかけているように思います。



本稿作成にあたり、出雲大社元禰宜伊藤征男様には、尊福公の和歌の解説にあたりご助言を頂きました。また尊福公の御歌集の中に、「東京府西多摩郡三田村の大澤橋の工事なれりとて歌こひければ」として、同じ和歌があるとのことご教示を頂きました。福岡県立大学教授岡本雅享様には、尊福公の東日本初の巡教となる青梅への来訪についてご教示を頂きました。御礼を申し上げます。

歌碑の採拓については、土地の所有者の方に許可を得て筆者が行いました。

参考文献 青梅市郷土博物館「生誕200年齋藤眞指の生涯」(令和4年11月)

岡本雅享「千家尊福と出雲信仰」(令和元年11月)

※大澤橋、大澤川の「澤」の文字は「沢」が用いられる場合が多いですが、本文では歌碑にあわせ「澤」の文字を用いました。(文責 黒田 耕)